

**謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話**

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

**「インドに還る、インドに伝える」③**

陽が沈みかけてきたので妙照寺を早めに切り上げることにした。「Nichiren 思親の霊場」たる実相寺は飛ばして去ろうかと思ったが、せっかくここまで来たので足を止めることにした。わが輩はここで Nichiren のもう一つの顔を見ることになった。

その丘には千年杉と松の木があった。Nichiren は庵(妙照寺)から毎朝上って来て、千年杉と松の間に立ち、袈裟を松に掛けて朝陽を拝んだと云われている。その彼方には生誕地安房の国(千葉県鴨川市)がある。そこには老いたる父と母が住んでいる。

出家者は父母への思念さえも捨て去り仏道に励むものである。しかし Nichiren ほど親思いの出家者をわが輩は知らない。

たまたま若いお坊さんが現れたので松の木の下で写真を撮ってもらった。わが輩の親不孝記念の写真である。Nichiren も自らを“親不孝者”と思ったのであろうか。

わが輩は東京に遊学させてもらった。卒業後は、就職もしないでインド放浪の旅にでてしまった。道を求めて、と言えば格好いいが、今となれば単なる言い訳にすぎない。そんなわが輩も、一瞬だが親に感謝したことがある。インドで Nichiren に出会ったからである。「父母の孝養ここにたらず」ということばが心に刺さった。手紙の書き出しが、「オヤジ・オフクロ」から「父上様、母上様」にかわった。両親は変化に驚き、ひょっとしたら「出家」してしまうのではないか、と思ったらしい。

学生時代は全く Nichiren に興味がなかった。あのころは道元に関心をもっていた。一年生のとき富士山に登ったついでに同級生の案内で大寺に立ち寄ったが、境内で刺すような視線を感じた。かつては同級生の自由な遊び場であったが全く変わってしまった。異質なものを排除するような雰囲気があった。その体験から Nichiren を避ける傾向になった。

インドで Nichiren に出会って最も驚いたことがある。仏教をインドに“還す”という発想をもっていたことである。仏教はインドで発祥、中国、朝鮮半島をへて日本に伝播した。その段階で発展し「日本の仏教」になった。それが本国インドに還ると(神の預言ではなく)予言したのが Nichiren である。鎌倉時代は、まだ中国、朝鮮半島から師を招いて教えを請う“輸入国”の時代であった。

単なる予測ではなく、Nichiren の直弟子 Nichiji は北海道、樺太、満州に渡ったという大陸渡航伝説がある。ちなみに、魚のほっけは Nichiji の「法華」からきているとも云われている。

三国（印度・中国・日本）の世界観だが、実に International な発想である。しかも、現代においてそれを実践する僧団があることに二度びっくりした。

当時は欧米で禅がもてはやされていた。しかし禅が中国・インドに還るという発想は、鎌倉時代はもちろん現代もない。インドには、ヨーガやヴィパッサナー瞑想などがすでにある。あらゆる宗教思想及び実践は、インドに集積しているといっても過言ではない。インド宗教思想の欧米への発信は、ヴィヴェーカーナンダのシカゴ宗教会議（1893年、明治26年）からすでにはじまっている。

問われるのは、日本宗教とは何か、独自性とは何か、ということではないだろうか。さらに、それが International なものをもっているか、ということだとわが輩は思う。

実相寺をあとにしたときはすでに暗くなっていた。バス亭から安房の国の方向を再度ながめてみたが、往時を偲ぶことはできなかった。運よく路線バスに乗ることができた。予約していた旅館志い屋の停留所で下りたが、道を間違えて逆の方向に進んでしまった。ますます腹がへってきた。疲れもでてきたが、とにかく道行く人がいないので尋ねようがない。たまたま自宅から出てきた女性に、旅館の位置を尋ねたら、女将と同級生だという。ご親切にも軽自動車で旅館まで送ってくれた。これも巡礼のご利益というものだ。

志い屋の前は加茂湖の美しい風景が広がっている。その対岸の山の中腹に白亜の仏塔が望める。おもわず感謝の合掌。温泉に入るとすべての緊張と疲れがほぐれた。インドがベストだが日本の旅もいいものだ、と思った次第である。

さて、われら現代日本人が、インドに還すものがあるのか、伝えるものがあるのか、ないのか。冷蔵庫やエアコンを造る技術だけなのか。文化的なものはないのか、次号で語ってみたい。